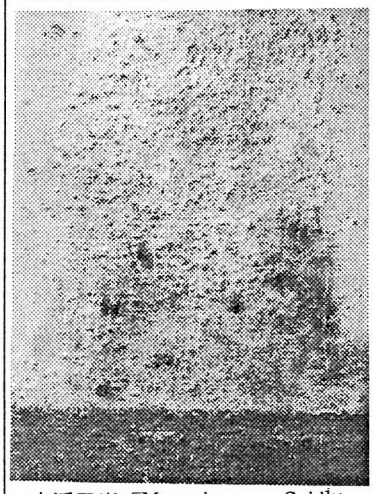
展評

表現意識への挑戦

大浜用光展

大浜用光の作品との出会いは、そんなに早くない。それでも第四回個展（一九八二年沖縄物産センター画廊）で観た「海嘯（かいしょう）」シリーズにはしばらく言葉を失うほどの衝撃を受けた。画面そのものが言葉を拒否しているかのようであった。禁欲的なほど抑制された構図が、逆に「海嘯」→潮鳴→大津波の連想を呼び、恐ろしいほどのエネルギーと緊張感がみごとに表現されていた。それ以来、ぼくは大浜の表現活動に注目してきた。

第七回の今個展では最近作の「Monochrome Gold」シリーズが圧巻である。とりわけその「1」と題された一



大浜用光「Monochrome Gold」

六二・一×一三〇・三㌢の作品は垂直方向へ昇華していくエネルギーの爆発を感じさせる。初めてこの作品を観ての帰り道、突然「生命の誕生、または星」という言葉がとび込んできた。久しぶり絵画によって新しいイメージが触発されたのだ。

大浜は一九八五年の第六回個展から、キャンバスの上に土を塗り付け、それをバーナーの炎で焼くことによってイメージを表現する方法を試みている。この方法は単なる思いつきや奇を衒（てら）ったものでないことは明らかである。本人は多くを語らないが、そこには既成の絵画表現意識への激しい抵抗と挑戦がある。一度、大宜味村の江洲に籠って土と火と焼き物とに格闘してきた彼の内面には、個人の表現意識の深層まで下降し、集合的無意識層を火と土の偶発的衝突によってイメージ化していく方法への必然的挑戦があると思われる。さらに彼の前衛意識が絵の具、顔料の原初である土へ回帰させ執着させたのではなかろうか。

大浜の作品は全体的に抑制された寡黙さに包まれているが、その背後には「絵画とは何か」「素材とは何か」「イメージとは何か」「自己表現とは何か」という根源的な疑問符と思想実験が横たわっているように感じる。

今回展示されている「Untitle」（無題）シリーズは以前にも何点か観たことがあるが、白から茶、こげ茶、黒まで焼き付けられた色調の変化と模様は、その気泡の跡のようなマチエールと共に観る側にとって月のクレーターや火山のカルデラや島の誕生などを連想させる。しかし、まだ画面のどこかに方法実験の生々しさが尾を引いており、作者の精神の抑制感や緊迫感を直接的に押しつけられているような息苦しさを感じてしまう。

ところが今回、金粉を混入したモノクローム・ゴールドシリーズの二点は作者の表現力がより自在になっているように思われる。しかも同時に混入された樹脂やニービスフニの岩層の焼け具合が色彩にもマチエールにもおもしろいバリエーションをもたらしている。ぼくが星たちを幻視したものそこにある。

同じ展覧会に二度、三度も足を運びたくなるかどうかは、ぼくの場合イメージの触発を受けるかと、表現思想への格闘があるかで決まる。大浜用光はタブロー絵画に縛られながら、必死にそれに抗っている。（高良勉・詩人）

（同展は三十日まで画廊「匠」で）